

下宅部遺跡の花粉と年代からみた 縄文時代中期から晩期の 植生史と植物利用

Vegetation History and Use of Plant Resources
in the Middle to Final Jomon Periods that were Reconstructed
Using Pollen Fossils and Radiocarbon Dates at the Shimo-yakebe Site, Tokyo

吉川昌伸・工藤雄一郎

YOSHIKAWA Masanobu and KUDO Yuichiro

はじめに

①調査地点概要

②分析試料と方法

③結果

④考察

【論文要旨】

下宅部遺跡の縄文中期から晩期の植生と植物利用の変遷、アサとウルシの分布を明らかにすることを目的に、主に炭素年代が得られている試料で花粉分析を行った。下宅部遺跡の植生史は、花粉化石群と年代に基づき4つの植生期に区分され、下位よりクリ林が優勢な時期（約5300-4400 cal BP；縄文中期中葉～後葉）、トチノキ林とクリ林期（約4200 cal BP；後期前葉）、エノキ属-ムクノキ属とトチノキ林期（約3800-3400 cal BP；後期中葉）、クリ林の拡大期（約3200-3000 cal BP；晩期前葉～中葉）、コナラ亜属とクマシデ属-アサダ属、カエデ属を主とする落葉広葉樹林期（約3000-2800 cal BP；晩期中葉）が認められた。縄文中期中葉には河川傍にクリ林が形成され活動的な生業があったが、後期前葉～中葉にはクリ材の利用により河川傍のクリ林が段階的に縮小し、その後にトチノキが拡大したことが明らかになった。クリは後期後半には河川傍から少なくなるが、晩期前葉には再びクリ林が拡大した。アサ畑は周辺にあった可能性があり、ウルシの雄株は近くには生えていなかった。

【キーワード】花粉化石群、クリ林とトチノキ林、縄文時代中～晩期、植物利用、放射性炭素年代